小学校における特別支援教育支援員活用の現状と課題

長谷川 裕太

I 問題と目的

特別支援教育支援員(以下、支援員)は2007年に文部科学省から財政措置によって配置することが決定され、各自治体での採用が進んでいる。文部科学省(2007)は支援員の有効な活用のために、管理職、特別支援教育コーディネーター(以下、コーディネーター)、担任教師、支援員との間で、支援員の役割、活動内容の把握を行い、連携を取ることが必要であるとしている。

しかし、武田・斎藤・新井・神(2011)は支援員との連携の時間が少なく、支援員から情報が受け取れないなど、支援員活用の体制構築が課題であるとしている。一方、山崎(2012)や大内(2011)は、支援員との連携の取り方について研究を行っているが、これらは担任と支援員の連携に関する研究であり、支援員の活用について、学校の体制としてどう整備していくかは検討されていない。支援員活用のための学校体制づくりはまだ検討段階であると考えられ、各学校における活用に関する現状と課題について具体的に明らかにしていく必要があると考えた。

そこで、校内での特別支援教育の体制作りに関わっているコーディネーターを対象に、支援員の活用における担任教師との連携、研修等についての取り組みの実態と課題について明らかにし、支援員活用に関する学校の体制を構築するための基礎的な知見を得ることを目的とする。

II 方法

1 対象

平成20年の文部科学省発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業においてグランドモデル地域に指定された、A県B市において支援員を配置している学校18校のコーディネーター18名のうち、研究協力可との返答をいただいた14校14名。

2 調査方法

対象者の勤務する学校で、一人当たり30～40

分程度の半構造化面接を実施した。許可を得た上で会話を録音し、逐語録を作成した。

III 結果

1 対象校における特別支援教育の目標設定

14校全てで特別支援教育の目標の設定が行われていた。また、特別支援教育の目標は学校の教育目標と関連させて設定されていた。

2 支援員への期待と役割

対象者の逐語録から、支援員への期待と役割として3カテゴリーと10サブカテゴリーが抽出された(表1)。「担任との関係」は、黒子的、同僚的に担任を支えるという内容であった。「支援員の介入で期待すること」では、学級経営の安定、児童の生活面学習面での自立等が挙げられた。「支援員の活動内容」は、困難の多い児童へのサポート、ティームティーチングなどであった。支援員に対して、黒子的に補助を行い、担任を支える同僚としての期待があることが分かった。

3 支援員との連絡連携の状況

支援員との連絡連携についての語りの中から、2カテゴリーと8サブカテゴリーが抽出された(表2)。「支援員への情報提供」では、会議への参加による情報の共有、休憩時間などを活用しての連携、立ち話などでの情報共有が挙げられた。しかし、会議への参加の時間や担任の思いを伝える時間が取れないなど、連携のための時間確保に追われている実態もあった。「支援員からの情報提供」では短い時間での立ち話などが挙げられた。情報共有の時間が限られている中、メモやノートを活用した連携がみられた。また、休憩時間や放課後に連携を行う等、支援員が勤務時間外にサービスの連携を行っている実態も明らかになった。

4 支援員への研修・指導の状況

支援員への研修・指導についての語りの中から1カテゴリーと5サブカテゴリーが抽出された(表3)。「支援員への研修・指導」では校内外での研修

表1 支援員への期待と役割

カテゴリー	サブカテゴリー	語り(抜粋)
担任との関係	担任を支える黒子的な役割	あくまでも黒子的な役割。担任と子どもをつないでくれる。
	担任を支え、一緒に考えていく同僚	一緒にその子のために何ができるかを考えて行く仲間って感じ。
支援員の介入で期待すること	一斉授業運営の補助	支援員が入ることで担任が授業を、全体指導でやっていける。
	個別のきめ細かい指導	子どもをきめ細かく見ていくことができますよね、はい。
	児童が安心してできるクラスづくり	あの一、学級集団が落ち着いて学習できたり、活用できたりってところの活用ですかね。
支援員の活動内容	児童が一人で活動できるよう促す	通常の学級の支援を必要としている子が、担任一人の支援でいけるようになった。
	特別支援学級での支援	特別支援のお子さんのニーズが重いというか、そういうことがあったので。
	担任及び級外とのチームティーチング	おもに一年生のTTといった形で入ってもらっています。高学年の算数へのTT指導。
	全体指導で動けない児童へのサポート	個別というか、具体的な声掛けをして学級の子どもたちが一時間一時間の授業をきちんと理解して、活動する。
	困難のある学級への重点的なサポート	〇年生が通常学級のほうで、支援の必要な児童が多いので、おもにそちらにTT入ってもらっています。

表2 支援員との連絡連携の状況

カテゴリー	サブカテゴリー	語り(抜粋)
支援員への情報提供	会議への参加がある	子供を語る会とか、学期に一度あるようなのは無理をいって出てもらう。
	会議へ参加ができていない	どうしても時間が限られてくるので会議や計画立案の場への同席はない。
	休憩時間における情報交換	金曜日の6限に特学3人の担任と支援員さんと茶を飲む機会が設けられていて、そこで話ができるんです。
	担任が自分の考えを伝える	毎回じゃないけど、特にこの子に付いてくださいとか、声かけしてくださいとか、そういうのを話し合ってるところは見ますね。
	担任が自分の考えを伝えていない	不適切な行動が、それほどでもない場合についてはちょっと、担任からも要求っていうのは少ないですかね。
支援員からの情報提供	休み時間、授業後など短い時間での立ち話	休み時間ですよ、放課後会えれば会うけど、そこでどんなことあったって話をしています。
	メモやノートを取る	いっぱいもらってますね。付箋に書いてもらって。
	特別支援教室関係者によるお茶会の実施	放課後お茶のみの時間などに特別支援に関係のある先生で集まって話し合いはしていますね。

やコーディネーターへの質問が挙げられた。

勤務時間の影響から校内での研修を挙げた学校は少なく、コーディネーターへの質問や日常会話

表3 支援員への研修・指導の状況

カテゴリー	サブカテゴリー	語り(抜粋)
支援員への研修・指導	市の研修への参加	外の研修会とかはお誘いしますが、家庭の都合もあってなかなか難しい。でも2回くらい出ていただきました。
	校内の会議、研修	一学期の間は、勤務時間の間は支援員さんにも時間の中で出ていただく。長期休業のときに何回か出ていただきました。
支援員からの質問	支援員からの質問	普段の情報交換の中で、こういう風にするといいんだよとか、具体的にいったりだとか。
	特別支援の授業観察	校長を中心に、肢体不自由の子がいるクラスにまづいて、そのクラスの担任もいるので、そこで対応の仕方を見てもらってというのがありましたね。
	研修への参加がない	必要に応じてだと思います、内容によって声はかけると思うんですけど、勤務もあるので、大丈夫かなって思うところははい。

表4 支援員活用による成果

カテゴリー	サブカテゴリー	語り(抜粋)
支援員を活用しての成果	学級経営の安定	個別に支援員さんが入ってくさるので、全体を担当が指導できるんだなと思っています。担任一人の支援でやっていけるようになったことが大きいですね。
	児童の安全の確保	生活面とか、休み時間にこんな風に遊んで、友達との関係とか、逆に困ってる視点も多く入りますよね。
	児童の自信の向上	学習面においては、自身の持てる子がふえた。できない子達をフォローしてくれるので、自信につながってるなって思います。
	保護者の安心	担任一人では勉強も進まない。そうすると保護者の中ではだれだれがいるから勉強が進まないって流れになってきます。でも、支援員がいてくれるから大丈夫って思ってもらえる。

の中での学習といったOJT的な研修が多くなっていった。勤務時間の都合上、休憩時間や放課後など、時間を見つけて研修にあたっている現状がうかがえた。そのような中、研修期間確保のため、特別支援学級での授業見学の期間を校長が中心となって設定し、実施するなどの取り組みもみられた。また、支援員が自主的に校外の研修会に参加していることも分かった。

5 支援員活用による成果

支援員を活用して得られた成果の語りの中から1カテゴリーと4サブカテゴリーが抽出された(表4)。「支援員を活用しての成果」では、学級経営の

表 5 支援員活用における課題

カテゴリー	サブカテゴリー	語り(抜粋)
支援員活用の課題	支援員との情報交換の時間が短い	情報を伝えていく時間の工夫ですよね。情報を引き出すやりくりも大事だなんて思います。
	支援員の役割の共有	先生方によってとらえがまちまちだったり、継続していく、同じ体制で同じ支援のやり方であって、いけるようになるのが必要かなと思うんです。
	全職員が支援員を活用できる体制	どの学級でも必要なときに支援員の助けが受けられるっていうか、そういう風になるのがいいかなと思ってます。
	勤務時間の延長	結局休み時間なしでやってもらうので、勤務時間ずらしたりしていただいたりすると、ほとんどサービスで5限の終わりまでいてもらってる感じですね。

安定、児童の自信向上などが挙げられた。支援員を学級で活用することで、指導に対する悩みなどが共有され、担任教師の負担が減少していることが分かった。また、生活面学習面において安定が図られ、自信をもって活動する場面が増え、児童の自立につながる事が分かった。保護者の特別支援教育への理解、安心にもつながっていた。

6 支援員活用における課題

支援員を活用する上での課題についての語りの中から、1 カテゴリーと4 サブカテゴリーが抽出された(表 5)。「支援員活用の課題」では勤務時間の短さから連携研修の課題が挙げられた。情報交換の時間が短く、支援員から得た情報を指導に生かせない、支援員に対して担任の意図が伝えられず支援内容に食い違いが出るといった現状があることが分かった。また、支援員の活用について担任によって差があるといったことから、全職員の支援員の役割理解のための説明機会の設定や、支援員との情報交換を明確にするための連携体制の構築も課題として挙げられた。

IV 考察

武田ら(2011)が課題として挙げていた、勤務時間の都合から連携や研修を行う時間の確保が困難であることは、B市でも課題となっていた。支援員と時間を取って情報共有を行うことができず、支援員の見取った情報が支援に反映されなかったり、担任の意図と支援員の活動にずれが生じたりする現状があることが分かった。また支援員の活

用が担任によって差があるなど、支援員の具体的な役割の共有が行えていないという語りもみられた。

しかし、連携や研修のための時間の確保が困難である中、お茶会や、メモ・ノート、授業観察期間の設定などを行い、連携や研修を行っている学校もみられた。支援ノートという形で継続的に支援員からの情報を得ている学校、学校長を中心として支援員の研修時間を確保するために特別支援学級での授業観察の期間を設けた学校など、学校の体制として支援員との連携や研修の機会を確保している学校もあるなど、様々な取り組みがなされていた。

支援員との連携では、休み時間、授業後の短い時間を使っての立ち話という語りが多くみられ、担任と支援員の間での個別的な取り組みとして行われている実態が多く、支援員との連携の取り方が全職員で共有されているとは言えなかった。そのような中で、学校の体制としてメモや授業観察期間の設定などの取り組みを定め、支援員と情報を共有し、課題解決を行っている学校の実態は、今後の支援員活用の体制構築のための一助になると考えた。

今回の研究では、各学校がどのようなプロセスを経て、支援員との連携の取り組みに着目し、校内体制として位置づけるに至ったのかは明らかにできなかった。支援員活用の有効な体制を構築していくためにも、現在体制として位置づけられている取り組みが成立したプロセスについて調査して行くことが必要ではないかと考えた。

文献

- 文部科学省(2007)「特別支援教育支援員」を活用するために。
 大内典子(2011)支援シートを活用した特別支援教育支援員への効果的なサポートについて—通級指導担当の立場から—。特別支援教育コーディネーター研究, 7, 7-11.
 武田篤・斉藤孝・新井敏彦・神常雄(2011)特別支援教育支援員の現状と課題—特別支援教育支援員へのアンケート調査から—。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 33, 189-193.
 山崎彰(2012)小学校における特別支援教育支援員の効果的な活用—特別支援教育支援員による適切な支援行動を具体化する手立て—。教育実践研究, 22, 279-284.